

石造物・身近な文化財

私たちの生活の中で石を材料として人工的に造られたものを数多く見かけます。それらの作品を石造物と呼んでいます。

鎌倉・室町時代の中世は、貴族などによる仏教中心の石造物で、市内には層塔・五輪塔・宝篋印塔・笠塔婆や石仏などの作品が残っています。この時代の五輪塔や宝篋印塔はお墓ではなく、供養塔として建立したもので、怖がらずに手を触れて観察し調査して下さい。

江戸時代も中頃になると、一般庶民も経済的な余裕を背景に、自らの生活によりどころを求めた民間信仰が多様な発達し、多くの石造物が造られます。鳥居・常夜灯・狛犬・石橋・手洗鉢・階段や玉垣など神社関係の遺品と、庚申塔・井戸杵・道標・墓石や各種顕彰碑など、信仰や直接生活に関係のある石造物が残されています。これらの遺品が調査の範囲です。

古代の石器・石棺・石室や礎石など考古学が対象としているものは調査からのぞいていますが、石棺の一部材を再利用して石仏や種子(梵字)を彫った石棺仏や、石棺種子碑などは調査の対象となります。

また、「石造美術」とい

文化財総合的把握モデル事業

ひと・まち・石

問合先

教育委員会
生涯学習課文化財係
☎448-8255

う名称を聞いたことがあるかと思っています。美術とついていますが、一般に言う鑑賞の美術ではありません。仏教伝来の年から慶長末年までの、仏教関連石造遺品の調査という定義をつくり、昨今では、マイナーな分野から一躍脚光を浴びるようになり、着々と成果が上がっています。

中世石造物の調査だけではなく、江戸時代の調査を実施するようになりました。それは、一般庶民の暮らしや、神仏を崇めた宗教心のあり方、何故にこの石造物を造り祈ったかを、銘文等を解明することで、文献学以外での地域史研究に役立つからです。文献に頼りがちな歴史の空隙を埋めることが可能な分野だと思っています。

これらの石造物から、先祖の人々の心を直接知ることとはできませんが、一つ一つから庶民生活や歴史の断片を見つけることができると思います。

今一度身近な石造の文化財を見直すきっかけになればと願っております。

(高砂市史編さん特別執筆者 藤原良夫)



曾根町 黒岩十三仏(部分)